

震災後、スイスでついた度胸

いま No.466 子どもたちは だから海外留学⑨

「ヤッホー」。インターネット電話の画面で、菅原彩加さん(17)は両手を小さく振り、くすくす笑った。「空気がいいからかな? こっちに来て、身長が

4センチ伸びたんです」
菅原さんは昨年4月から、ヨーロッパ・アルプスにある全寮制高校、スイス・レザンアメリカンスクールに留学中だ。2年前の今ごろ、まさかスイスにいらぬとは思ってもなかった。
あの日は中学の卒業式だった。2011年3月11日、宮城県石巻市の自宅に帰宅後、強い揺れがあり、津波の濁流にのまれた。がれきの下から母の声。助けようにも、がれきはびくと



昨年10月、被災地の学生が集うプログラムに参加するため一時帰国した菅原彩加さん(17)が、スイス・レザンアメリカンスクールで授業を受けている様子。

もしない。このままでは自分も流される。悩んだ末、一人で泳いで小学校へ向かった。母と祖母、曾祖母を失った。「これ以

上つらいことはもう一生ない」半年後、中国であった夏季スポーツ会議に参加。被災した若者の教育支援をする財団法人、ピヨンドトゥモロー(東京)の企画で、被災体験を発表した。各国の参加者が励ましてくれた。

「視野を広げ、前に進みたい」。そう思っていたとき、同法人が被災した高校生の留学支援を始めた。学校が学費と寮費を免除してくれるという。こんな機会は何処にもない。一緒に仮設住宅で暮らす祖父も賛成してくれ、スイスへ飛び立った。学校では毎週、授業でプレゼンがある。最初はうまくできず落ち込んだが、徐々に紙を見なくても話せるようになった。
昨年12月、級友たちの前で震災について語った。津波でなく、原発事故で多くの死者が出たと思われていることに驚いた

からだ。発表後、ロシアや台湾から来た生徒が被災地支援の募金をしてくれた。「自分が来たかいたのがあったのかな」
震災で失ったものは計り知れない。でも、得たものも大きいと思う。留学し、苦手なことでもやってみよう、という度胸がついた。自分よりつらい思いをしている子どもが、世界にたくさんいることも知った。
親を失った子に寄り添い、海外の子どもたちとの交流を支える。将来、そんな「自分だからできること」をしていきたいと思う。
(杉山麻里子)